

## 達意簡明

明治時代の文芸評論家、千葉亀雄氏は

「短く書け、すれば人は好んで読む。

ハッキリ書け、すれば人は理解する。

絵で書いたように書け、すれば人は記憶する」

という言葉を残しています。

私にとっては、文章を書く上での座右の銘といったところですが、勿論、そのようにして文章を書けているわけでは、毛頭ありません。

私は、随分と長く役人生活を送ってきましたが、その中で、「企画書」「条例案」「通達案」「上司の挨拶原稿」など、実に沢山の文章を書いてきました。こうした仕事上の文章は小説などの文芸作品とは違いますから、文章のスタイルも文芸作品とは異なるものになるはずです。

仕事上の文章には、深みも余韻も必要ありません。むしろ邪魔であり、混乱の元ともなりましょう。むしろ、一番大事なことは、まず正確であること、伝えなければならないことを過不足なく書き込むことだと思っています。だからといって、文章が冗漫ではだめであり、できるだけ短く、簡潔に書くことが求められます。それを一言でいえば「達意簡明」ということです。

私としては、これまでも、文章を書くに当たっては「達意簡明」に心掛けては来ましたが、思うようにはならないというのもまた、書くことの難しさということでしょう。

小説家の川端康成氏は、かつて「話すように書ければ文章の名人です。書くように書ければ文章の達人です」と評論家の草柳大蔵氏にお話になったとのことですが、最近私は、文章を如何に書くかというより、その元となる「話」の方が如何に大事かということを感じています。

話すべきこと、伝えるべき思いがなければ、如何に美文を並べてみても、それは言葉の浪費に過ぎません。

昨年4月に亡くなった井上ひさし氏は「言葉は道具ではありません。第二言語、第三言語は道具ですが母語＝第一言語は道具ではありません。精神そのものです。」と述べています（同氏著「日本語教室」）。

だとすれば、言葉を粗末にするということは、自分自身に内発する自分自身の精神を粗末にするということにもなりましょう。

今や、政治家も役人も、言葉を軽く、粗末に扱っているように感じてなりません。それは取りも直さず、政治や行政の貧困さの現れに外なりません。言葉を扱う者の責任の重さを、改めて認識すべきです。

むずかしいことを やさしく

やさしいことを ふかく

ふかいことを おもしろく

おもしろいことを まじめに

まじめなことを ゆかいに

ゆかいなことを いっそうゆかいに

井上やすし氏が残したこの言葉は、文章作法の極意であると同時に、彼の生き方そのものであったと感じています。

私には到底及ばぬ精神の高みですが、これからも一語一語大切にしながら、自分の思いを伝えられるよう精進していきたいと思っています。

（塾頭 吉田 洋一）